

大学ライティングセンターに関する考察

——その役割と目的——

吉田 弘子

Scott Johnston*

Steve Cornwell**

要旨

大学ライティングセンターは、大学内でライティングに関する様々なガイダンスを行うところであり、ライティング前のプレインストーミング、構成、草稿作成などライティングに関するあらゆる相談を受け付けている。日本において大学ライティングセンターはあまり周知されておらず、その実態や運営についての系統的な調査はほとんど存在しなかったが、筆者らは科学研究費を受けて日本における大学ライティングセンターについての調査を実施した¹⁾。本稿では、その研究結果の一部として、日本の大学に設置されている多様な大学ライティングセンターを紹介し、大学教育におけるライティングセンターの役割を論じる。

キーワード：ライティングセンター、ライティング、大学教育、プロセス・ライティング

I 大学ライティングセンター

大学での学業の達成に「書く力」が「読む力」とともに不可欠であることは言うまでもない。しかしながら、近年18歳人口が減少し、大学入試が多様化したことなどにより、大学生の基礎学力が低下し、大学の授業に対応できる学力が十分でない学生が増えてきた。また、最近では同じ大学・学部・学科に入学する学生の間でもかなりの学力の差が生じていると指摘されている。(日本リメディアル教育学会, 2005)。大学生の学力低下は日本だけの現象ではなく、米国でも20世紀後半に見られた。米国の大学ではアフーマティブ・アクションの導入により大学の門戸がより多くの学生に開かれ、その結果1960-70年代に十分な基礎力が伴わない学生が多数入学するようになった。そして、これに対処するために、多くの大学で不足する基礎学力を補う手段が講じられるようになり、その一つとして、ライティングセンターがその任を担うことになったのである (Waller, 2002)。

大学に設置された当初のライティングセンターでは、カリキュラムの特定クラス (例え

* 大阪女学院大学 国際・英語学部教授

** 大阪女学院大学 国際・英語学部教授

1) 科研費 (No. 19520531) 研究課題「大学ライティングセンターの構築と運営に関する研究—EFLの視点から」研究代表者：Scott Johnston (大阪女学院大学)

ば、composition など)を受講する学生のリメディアル、つまり学生の不足する基礎的ライティング力を補正・修正するために特別なドリルや問題集などが用意されることが多かった。しかし、デラウェア大学 (the University of Delaware) やワイドナー大学 (Widener University) などでは、卒業生の低いライティング力に対する懸念が社会から寄せられるようになるにつれて、特定クラスの補習的要素の強かったライティングセンターを学生のライティング力を高めるための全学的な機関として位置づけるようになった (Waller, 2002)。そして、1990年代にはこの大学カリキュラム横断型のライティングセンターが主流となったのである (Kinkead & Harris, 1993)。

また、ライティングセンター発達の一因には、ライティングに対する教育指導法の変化が影響を与えたことは見逃せない。詳細は Pritchard and Honeycutt (2005) に譲るが、1980年代にライティングの指導が、従来の完成稿 (プロダクト) のみを対象にする指導方法から、ライティングのプロセス (構想, アウトライン, 草稿, 完成稿) を重視した指導へと大きな変遷を遂げたのである²⁾。この新しい指導方法は学生に各プロセスにおいて、より時間をかけて準備を行いライティングに向き合うことを促した。そしてライティングセンターはそのプロセスを手助けする役割を担うものとして、単なるリメディアル (修正・補習) を提供する場からさらに発展を遂げてきたといえる。

現在米国の大学ライティングセンターは、各大学によってその規模や形態、提供しているサービスなどは様々であるが、次に紹介するマサチューセッツ工科大学 (MIT) のライティングセンター紹介 (Massachusetts Institute of Technology, 2009) がその基本概念をよく表しているので紹介する。

MIT のライティングセンターは MIT に所属する人々すべてに一年を通じて様々なサービスを提供するものである。学生や教職員は無料で文法やライティングスタイルまでライティングに関するいかなる相談を行うことができる。具体的にはライティング時にぶつかる壁を乗り越える方法、論文の組み立て方、論述式の期末試験の受け方、ライティングの推敲、あるいは科学的なプレゼンテーションの準備などが挙げられる。相談者はライティングのいかなるプロセス、つまりライティング前、草稿執筆時、推敲時、あるいは編集時などにセンターを訪れることができる。相談者が学生の場合は、ライティングの課題でよい成績を修めたいという気持ちが強いかもしれないが、センターではいわゆる「校正」を行うことはしない。センターの目的はライティングをプロセスと考え、よいライティングのためのコツを明確にし、修得してもらうことである。(中略) センターではさらに、英語が第二言語の相談者に特別な支援を行っている。(筆者訳、下線は筆者による追加)

このようにライティングセンターでは、マンツーマンでライティングに関する様々な相

2) この指導はプロセス・アプローチと呼ばれ、現在ではライティング指導の主流となっている。

談を無料で、ライティングのすべての段階（ライティングに取りかかる前、草稿作成や推敲、書き上げたあとの編集時など）で校正を除く指導を受けることができるのである。また、ライティングセンターで指導を行うものは通常チューターと呼ばれ、専任・非常勤の教員の場合もあるが、プロのライター、一定の基準を満たした大学院生、学部生が担当する場合もある。ライティングセンターを訪れるのは学生の場合、自発的に利用するもの、教員の勧めで来訪するもの、あるいは授業で利用が義務付けられる場合も時としてある（Harris, 2009）。

Ⅱ 日本の大学ライティングセンターの役割と目的

米国に比べ、日本で大学ライティングセンターが認知され始めたのはごく近年のことである。日本でも英語で授業を展開し、読解、聴解、発表などとともに英語でのエッセイやリサーチペーパーを必須とするいくつかの大学が、学生へのサポートのひとつとしてライティングセンターの役割に注目し、2000年代半ばに相次いでスタートさせた。その背景には、大学で求められるライティングと中学、高校で学ぶライティングには大きな乖離があり、日本語を母語とする英語学習者にとっては、大学レベルでの英語ライティングが容易でない（Bamford, 1993; Gorsuch, 1998, 2001）という現実がある。これは、ほとんどの日本の中学・高校では、英文ライティングとは「与えられた日本語を英文に訳すこと」、いわゆる「英作文」を意味し自ら主体的にメッセージを伝えるライティングはとりあげられていない（Hirose, 2001）ためである。また、中学・高校で求められるのは、数センテンス単位のライティングであり、パラグラフすら英文で書くことなしに大学に入学している学生も多い（Cornwell & McKay, 2000）ことも一因であろう。

筆者らは、2007年度から日本国内の大学ライティングセンターについて調査を開始したが、その当時は、ライティングセンターに関する系統的な報告がなく日本の大学でのライティングセンターの実情はほとんど知られていなかった。そこで、ライティングセンターを訪問したり、アンケートを実施したりしてライティングセンター責任者からの聞き取り調査を行った。以下、その代表的な例を紹介する（資料参照）。

早稲田大学では2004年に国際教養学部の設立とともにライティングセンターをスタートさせた。早稲田大学のライティングセンターで指導の対象とするのは、英語論文だけではなく留学のための英文願書のエッセイなども含まれ、海外からの留学生に対しては日本語ライティングの指導も実施している。当初は同学部の学生を対象にしていたが、需要の伸びとともに、2008年10月からはその対象を全学部に拡大した。早稲田大学のライティングセンターで受講者にライティングの指導を行うチューターは訓練を受けた博士課程前期や後期の大学院生及び海外から留学している学部生である。ライティングセンターでは、チューターを対象とした週に一度のミーティングを持ち、互いの指導方法の分析やロールプレイを行い、研鑽をつむ機会を設けている。

上智大学のライティングセンターは、国際教養学部 of 学生を対象にしている。同大学の国際教養学部は、アメリカの大学と同様に入学試験時に TOEFL や SAT のスコアが必要であり、学生の多くを外国人留学生や留学経験者、帰国子女などが占める。授業はほとんどが英語を用いて行われ、ライティングセンターの役割もアメリカの大学に極めてよく似た環境にあり、指導は英語で行われている。また、対象は学生のみにとどまらず、教員が学会発表のために提出するアブストラクトや論文投稿の際のガイダンスも行っている。

東京大学では、駒場キャンパス教養学部で2005年にクリティカル・ライティング・プログラム (CWP) を設立し、パイロットプログラムとして1, 2年生を対象にしたティーチング・アシスタント (TA) を使ったライティングの個別指導を提供とするようになった。当初は厳密な意味でのライティングセンターではなく、授業の一環としてチューターを利用するというものであったが、2008年には、理系アカデミック・ライティング・コース (Active Learning of English for Science Students: ALESS) に在籍するすべての一年生が希望に応じてライティングの指導を受けられるようになった。他大学のライティングセンターが学部全体のミッションをサポートする目的で設立されていることと比較すると研究色の強い東京大学のライティングセンターの目的は、講義で課題として出される英語論文作成の手助けを主としている。

大阪女学院大学は、2004年に4年制大学が新設されたのをきっかけに、それまで短大部で実施していた週1回のライティングクリニックを週6日開講のセンターへ発展させた。ライティングセンターは Self-Access & Study Support Center (SASSC) と呼ばれる学習支援センターの一環で、英語で行われている多くの講義で出されるエッセイ、サマリー、リサーチペーパーに取り組む学生を支援することを目的としている。大阪女学院大学のライティングセンターの特徴は、チューターが英語母語話者の教員 (専任及び非常勤) である点である。従って、すべての指導は英語で行われている。

コロンビア大学ティーチャーズカレッジ日本校は、アメリカのコロンビア大学ティーチャーズカレッジ (TC) の日本校であるが、日本では修士プログラムだけを有している。アメリカ本校と同様にすべて英語で書くことを求められるコースペーパー (クラスの課題) のために利用する学生が多い。ティーチャーズカレッジでは、ライティングセンターの利用は、有料 (3000円/1回60分) である。大学のライティングセンターは「無料」で実施されていることがほとんどであるが、このように大学 (院) の事情によっては有料のライティングセンターを設置しているのは興味深い。

調査の結果、ライティングセンターのあり方は一律ではなく、大学によってその対象とする学生、提供するサポートの種類や規模なども様々であることが明らかになった。しかし、多くのライティングセンターに共通している点は、ライティングセンターが単に学生

のライティングをチェックする場ではなく、学生が「自立した書き手」になるために、あるいは「書くという行為を通して考えを発展させることができる」ように手助けする場であるという考えをもとに運営されていることである。ライティングセンターで提供されているサポートの内容を大きく分けると（１）書く前段階の準備（２）草稿作成（３）スピーキングに関するもの（４）その他、に分類することができる。（１）はブレインストーミングや考えをまとめるためのサポート、（２）は構成や語彙などのサポート、（３）は、プレゼンテーションやディスカッションのサポートなどが含まれる。また（４）の例としては就職活動や留学のための履歴書やエッセイ、TOEFLのエッセイ作成のサポートなどが挙げられる。

さらにライティングセンターで扱う言語は英語だけではなく、日本語のライティングセンターを開設している大学もある。例えば、金沢工業大学のライティングセンターでは、授業の課題として出された小論文やレポートの文章添削を行うほか、就職試験のための小論文、履歴書、各種手紙文、講演レポート、自学自習で作成した小論文など、多様な日本語の文書作成に関する個別指導を専任指導者２名及び外部添削者20名により実施している。

また、津田塾大学では、添削は行わないが授業の課題やレポート、履歴書など「日本語で書くこと」に関する相談を受けつけるライティングセンターを2008年にスタートさせた。津田塾大学では、他大学の英語のライティングセンターと同じく単に課題の手助けだけでなく、センターでのチューターとの話し合いのなかで、学生自らが問題点や修正法を見つけ「自立性のある書き手」を育てることを目標にしている。

これらの日本語のライティングセンターでは、先述したアメリカのライティングセンター設立当初の事情と同様に、多様な学力の学生を受け入れざる得ない現在の日本の大学事情を反映して、母語である日本語ライティングのリメディアル要素も含まれていると思われる。この点で、日本の大学ではライティングセンターという名称は必ずしも十分でないかもしれない。各大学のライティングセンターにおいて、単にライティングのサポートだけでなく、外国語学習に関するいろいろな手助けや履歴書作成などの実用的なヘルプが行われており、その意味では、ラーニングセンターやサポートセンターなどと呼ぶ方がふさわしいといえるだろう。

Ⅲ ライティングセンターの設立・運営の留意点

実際にライティングセンターをスタートさせるにはどのような点に考慮するべきであろうか。Simpson (2004) は、まず、センターは大学がおかれている状況や背景と密接に結びつけて考えられるべきであり、それらを考慮することなしに効果的に活用はできないとして、ライティングセンターを設立する場合の留意点を指摘している。以下にいくつかそのポイントを述べる。

(1) ミッション

ライティングセンターを設立するにあたり、センターの使命や目的を明らかにすること

は不可欠であり、他大学のライティングセンターを模倣するだけでは不十分である。また、大学にミッションステートメントが存在する場合は、ライティングセンターの使命は大学のミッションと一致あるいは補完またはサポートするものでなくてはならない。検討項目としては、大学院プログラムがあるのか、研究ミッションはあるのか、法科大学院や医学・薬学などのプログラムがあるのか、あるいは学部教育を強調しているのか、遠隔教育はあるのかなどが挙げられる。大学の教育プログラムとのかかわりを考慮することはライティングセンターの予算等を考慮する点でも大切である。

(2) 学生プロフィール

ライティングセンターを利用する対象学生の情報を正確に把握することも大切である。総学生数、平均年齢、勤労学生の有無、卒業率、学部/専攻ごとの人数、学生の一年の平均講義受講数、卒業年数等の情報は、大学の関連事務局などで得られることができる。これらの情報は、対象学生に適したライティングセンターのニーズを分析し、センターを構築する上で不可欠である。

(3) 組織の意思決定

それぞれの大学には独特の意思伝達や決定方法がある。大学独自の意思決定のプロセスを理解しておくことは、ライティングセンターの設立・運営をスムーズに行うために必要である。特に、大学の意思決定システムを正しく理解し、意思決定プロセスにかかわるすべての人に対して正統な連絡経路でアプローチを行うこと、予算に関する陳情は書面で行い、口頭では行わないこと、書面による議題提案を行うなどは、どの大学においても共通の重要項目である。

(4) 予算プロセス

大学の予算獲得方法および予算管理について理解しておくことは、ライティングセンターを長期的に運営するためには不可欠である。また、予算を獲得してもライティングセンターにその執行裁量権がない場合もある。予算を執行できるのかどうかはライティングセンターの運営に大きくかわるので、予算を申請する際にはその予算でどのような効果が見込めるか、という点を説明することを忘れてはならない。

(5) ニーズ分析

ライティングセンターを設立、運営しようとするには、2つのニーズ分析が必要である。ひとつは、大学がなぜライティングセンターを必要とするかを明らかにすること、もうひとつはライティングセンターの予算、人員、設備、施設をどのようなものにする必要があるかという点である。方法としては、大学のカリキュラムの精査、教職員や学生へのアンケート、大学の上層部の意向調査などが考えられる。

以上が、Simpson (2004) が指摘するライティングセンターのスタート前に考慮しておくべき点であるが、筆者らはこれらに加えて運営責任者及びチューターの選択を早い時期に決定しておくことも提案している (Johnston, Cormwel & Yoshida 2010)。これは、アメリカと異なりライティングセンターの責任者や指導を実際に担当する適切なチューターの

確保が日本では難しい場合が多いからである。無論、ライティングセンターを設置している大学ではそれぞれ大学の实情に応じた工夫を講じているが（資料参照）、これらを組織として整えていくためにも早期に責任者を定めることが必要である。アメリカでは、ライティングセンターの責任者は、通常ライティングあるいはライティングセンターに関して専門知識を持っていることが多いが³⁾、日本やアジアでは、責任者がライティングの専門家でない場合の方が圧倒的である。筆者らが訪問した大学ライティングセンターの責任者の多くは、センター開設時にはライティングに関しては専門外であったが、責任者としてライティングセンターの運営にかかわりながら、自らも研鑽を積み重ねていた。

また、ライティングセンターに、最初から立派な施設や設備が必ずしも必要でない点にも触れておきたい。先に紹介した大学ライティングセンターでは小規模でスタートさせ、運営を開始後に利用の記録などの実績を残すことにより少しずつ周囲の理解を得て施設などの充実を図ったものも多い。

IV まとめを代えて

本稿では、ライティングセンターに関する歴史が長く研究も活発に行われているアメリカの大学ライティングセンターの概要を説明し、筆者らが行った調査（現地調査及びアンケート）をもとに日本の大学ライティングセンターについて論じた。また併せて、ライティングセンターを設立・運営する際の留意点を紹介した。

筆者らが本研究を開始した2007年当初は、英語を対象言語にしたライティングセンターを念頭において調査を開始したが、ライティングセンターの存在が確認できたのは、わずか数大学のみであった。しかし、それ以来この3年の研究期間に調査を進め、学会などで発表するに従い、新たにライティングセンターをスタートさせた大学が明らかになり、また設立を計画する大学からの問い合わせも増加した。さらに、対象言語が英語だけではなく、日本語のライティングセンターを運営している大学の存在も増えている。

ライティングセンターの設立・運営は、施設を造り人員を配置すればよいというような単純なものでは決してなく、大学と学生のニーズを分析し、また正規の授業との連携を含めた全学的な構想のもとに推し進めなければならない。筆者らが調査したライティングセンターでは、大学により目的は異なるが、各大学のニーズにふさわしい学生サポートを提供するために関係者の多くが真摯に研鑽に励んでいる姿が印象的であった。また、ライティングセンターで学生がチューターを務めている大学では、チューター自身が成長を遂げ、運営責任者を驚かせることも多々あるという。

大学ライティングセンターは日本ではまだ黎明期にあるが、少しずつしかし確実に大学の一部機関として認識され始めている。今後の日本の大学ライティングセンター（ラーニングセンター）のさらなる発展に期待したい。なお、紙面の関係で一部の紹介となったが

3) ライティングセンターが学問の一領域として認識され、ライティングセンターに特化した国際学会（International Writing Centers Association）も活発に活動している。<http://writingcenters.org/> 参照。

本研究の詳細については Johnston, Cornwell and Yoshida (2010) 及びホームページ (<http://www.wilmina.ac.jp/ojc/edu/research/kaken/Johnston>) を参考にされたい。また、日本及びアジアの大学ライティングセンターのネットワーク (<http://groups.yahoo.com/group/asianwritingcenters/>) を設立し、相互の情報交換を行っているので併せて参照されたい(使用言語は英語)。

謝辞 本研究は科研費 (No. 19520531) の助成を受けたものである。3年に及ぶ本研究に対して、惜しみないご協力をいただいた大学関係者、ライティングセンターの関係者の皆様に心より謝意を表したい。

参 考 文 献

- Bamford, J. (1993). Beyond grammar translation: Teaching students to really read. In P. Wadden (Ed.), *A handbook for teaching English at Japanese colleges and universities*. (pp. 63-72). New York: Oxford University Press.
- Cornwell, S., & McKay, T. (2000). Validating a measure of writing anxiety for Japanese students of English. *JALT Journal*, 22, 114-139.
- Gorsuch, G. (1998). *Yakudoku* EFL instruction in two Japanese high school classrooms. *JALT Journal*, 20, 6-32.
- Gorsuch, G. (2001). Japanese EFL teachers' perceptions of communicative, audiolingual and yakudoku activities: The plan versus the reality. Retrieved March 10, 2001, from <http://epaa.asu.edu/epaa/v9n10.html>
- Harris, M. (2009). Writing center concept. Retrieved Aug 25, 2009, from <http://writingcenters.org/resources/writing-center-concept/>
- Hirose, K. (2001). Realizing a giant first step toward improved English writing: A case in a Japanese university. In I. Leki (Ed.), *Academic writing programs* (pp. 35-46). Alexandria, VA: TESOL.
- Johnston, S., Cornwell, S., & Yoshida, H. (2010). *Handbook on starting and running writing centers in Japan* (大学ライティングセンターの構築と運営に関する手引書). 大阪: 大阪女学院大学.
- Kinthead, J. A., & Harris, J. G. (1993). *Writing centers in context: Twelve case studies*. Urbana, Ill: National Council of Teachers of English.
- Massachusetts Institute of Technology. (2009). Providing free professional advice about all types of writing and speaking to all members of the MIT community. Retrieved Aug 26, 2009, from <http://humanistic.mit.edu/wcc>
- Pritchard, R. J., & Honeycutt, R. L. (2005). The process approach to writing instruction: Examining its effectiveness. In C. MacArthur, S. Graham, J. Fitzgerald (Eds.) *Handbook of writing research*. New York: Guilford Press.
- Simpson, J. (2004). Assessing needs, identifying an institutional home, and developing a proposal. In B. B. Silk (Ed.), *The writing center resource manual*. Emmitsburg, MD: NWCA Press.
- Waller, S. C. (2002). A brief history of university writing centers: Variety and diversity. Retrieved

2009 Aug 24, from <http://www.newfoundations.com/History/WritingCtr.html>
日本リメディアル教育学会. (2005). 設立要旨. Retrieved 0825, 2009, from <http://www.remedial.jp/index.html>

資料

大学ラーニングセンターの概要

	大阪女学院大学	金沢工業大学	上智大学	東京大学 (駒場キャンパス)	早稲田大学
対象者	全学生(学部・大学院)	全学生(学部・大学院), 全教職員	国際教養学部学生(300名の留学生含む)・教職員・大学院生	東京大学教養学部ライティングコース受講の1, 2年生, 2008年度からは理科系1年生も利用可となった	全学部学生・教員
設置場所	自習室の一角	ライブラリーセンター2階	国際教養学部	クリティカル・ライティング・プログラム(CWP)オフィス内	早稲田キャンパス7号館1F
対象言語	英語	日本語	英語	英語	英語, 日本語
指導対象課題	ライティング, プレゼンテーション, パワーポイント, 文法, ディスカッション	課題小論文, レポート, 履歴書, 手紙など文章に関する全て	全てのライティング(大学院受験エッセイ, 手紙など, 教職員は論文)	クラスの課題レポート	クラスの課題レポート, プレゼンテーション, 留学願書, TOEFL エッセイ
1回のセッションの長さ	15分	特になし	45分	30分	45分
チューター(指導者)	英語母語とする英語教員	専任指導者2名及び外部添削者20名	大学院生10名(教員推薦による), プロ(2名)	大学院生5名	博士課程学生5人, 修士課程学生10人, 学部生3人(学部生はライティングセンター指導経験のある海外からの留学生)
オンラインヘルプ	なし	なし	なし	なし	なし
予約方法	ライティングセンターで2週間先までの予約が可能, 予約がないときはその場ですぐ受講可	なし	オフィスで受付(2週間先まで)すぐに予約が埋まるので, その場で受けつけられることはほとんどない	コースの担当教員に申し込む	オンラインで予約。ただし予約がない時, キャンセルになった時はその場でも受講可
ライティングセンター開室時間	月-金17:00-20:00 水 16:00-20:00 土 14:00-16:00	月-金 8:30-18:00 土 8:30-13:00	月-金11:00-16:45	チューターと学生の交渉	月-金10:40-17:05
チューター(指導者)への支払い	3000円/60分	非公開	1200円/60分	1100円/60分	博士課程学生, 修士課程 学生1100円/60分 学部生 900円/60分
チューター(指導者)の訓練	最初にライティングセンターの説明, 質問の導き方の紹介など。センター長と必要に応じてメールなどで相談	毎年, 年度初めに業務全体説明会を実施。また随時, 添削物について専任スタッフが内容を確認し, 各添削者へ添削レベルを合わせるための助言・指導を行う	トレーニングセッション受け, 資料を読む	大学院で指導クラスを修了した者	チューターは Academic Writing クラス修了者。ライティングセンターでは週に2時間チューターミーティングを開いている

	大阪女学院大学	金沢工業大学	上智大学	東京大学 (駒場キャンパス)	早稲田大学
ライティングセンタースタッフ	1人の専任	センター長1名(兼任)、専任指導員2名、事務スタッフ1名、外部添削者20名	1人の専任、ただし、他学部の専任のヘルプ有、スタッフ	CWPプログラムの一環のためなし	2人の専任教員。うち一人はライティングセンター専属。2人の専任教員
ライティングセンター長への報酬	業務の一部	なし	他の委員会の負担軽減	仕事の一部	金銭的特別報酬なし。ただし、1コマ担当とみなされ、クラス担当数が1コマ軽減されている
ライティングセンターの記録	あり	センター訪問による学生について面談時に学年、クラス、目的、形式を記録	センターの秘書が記録(利用者名、どの教員の指導で来訪したかなど様々な記録)	なし	予約を入れた学生数は記録に残している。セッションのポイントもカルテのように個人別に保存
予算	大学から予算計上	法人から予算計上	大学から予算計上	大学から予算計上	大学から予算計上(2004-2008は国際教養学部の予算)
ライティングセンターで利用可能なもの	文法、ライティング、コンピュータの利用法のハンドアウト、辞書、シソーラス、コンピュータ	ライティングセンター作成による冊子	辞書、コンピュータ、ライティングに必要な種々の資料(書式マニュアル、ライティングガイド、文法、ライティングセンターに関する理論、チューターガイドなど)		チューター(指導者)用指導書、コンピュータ、辞書
ライティングセンターのPR方法	案内冊子、	1年次必修科目での案内やライティングセンター主催の講座募集案内。ライブラリーセンターHPに掲載	ポスターなど		ホームページ上
相談方式	1対1、英語による相談	来訪による相談。主に1対1で実施されるが、1対2などもあり(特に制限等なし)	英語	英語	1対1(英語または日本語による相談)